

### B-3 当院における多発性骨髄腫 146 症例の染色体異常と予後

○新井康之、森田怜子、前田 猛、上田智朗、城 友泰、岡田和也、河田岳人、伊藤 健、大西達人、水谷知里、松山文男、上田恭典  
倉敷中央病院 血液内科

【目的】多発性骨髄腫の染色体異常と予後の後方視的な解析に加え、新規薬剤 Bortezomib の治療効果を検証する。【方法】2001 年から 2008 年に診断した多発性骨髄腫のうち、初診時に染色体分析を施行し分裂像の得られた 146 症例について後方視的な検討を行った。【結果】G 分染法では、正常核型 70 例に対し、76 症例で異常を認め、臨床病期が進むとともに高頻度に染色体異常を認めた。この中で 68 例は数的異常を伴い、そのうち 43 例は 13 番染色体の欠失、14 例は 11;14 転座を持っていた。3 つ以上の染色体異常を伴う複雑核型は 64 例認めた。数的異常を伴わない染色体異常(4 例)はすべて 11;14 転座であった。生存期間中央値に関しては、染色体異常を持つ群(2.73 年)が持たない群(4.95 年)に比べて短い傾向にあり、複雑核型を有するものは有意( $p=0.04$ )に予後不良で、13 番染色体欠失でも不良な傾向にあった。G 分染法で正常核型群のうち、FISH 法で t(11;14)を持つものは予後良好、13 番染色体欠失を認めるものは予後不良な傾向であった。化学療法や自家移植後の salvage として Bortezomib を使用した 25 例では、複雑核型や 13 番染色体欠損の有無で予後に有意差は認めなかった。【結論】細胞回転の遅い多発性骨髄腫では、G 分染法で異常な分裂像が得られること自体が予後不良と考えられ、染色体検査の重要性が再確認された。Bortezomib は再発難治例に優れた効果を持ち、これまで知られてきた予後不良因子の影響を打ち消すことが示唆された。